

薬史レター

日本薬史学会

J S H P



第 78 号

2017 年 9 月

日本薬史学会賞など 3 賞の公募について

日本薬史学会会長 折原 裕

2017 年度日本薬史学会総会の決定に基づき、日本薬史学会賞、日本薬史学会奨励賞、および日本薬史学会特別賞を公募いたします。日本薬史学会賞は薬史学に関する学術の進歩発展に顕著な功績をなした方、日本薬史学会奨励賞は、本学会の活動において、顕著な貢献の可能性を示している方あるいは活発な研究発表を行っている方、日本薬史学会特別賞は、高度な学術的貢献または本会の維持運営に特に功績のあった方に対して授与します。推薦者（自薦・他薦）は本学会会員とし、下記推薦様式により 2017 年 10 月 30 日までに郵送にて申請してください。なお、各賞の選考には本学会褒賞規程に従い、選考委員会を設置し理事会にて決定します。

推薦様式

- | | |
|---------------------------|---------------------------|
| 1 推薦書類は、A4 版用紙に記載するものとする。 | 3 推薦書類の送付先： |
| 2 推薦書類は、次のとおりとする。 | 〒113-0032 東京都文京区弥生 2-4-16 |
| (1)推薦書 (2 ページ以内で次の内容を含む) | (一財)学会誌刊行センター内 |
| A 被推薦者の氏名、所属、職名 | 日本薬史学会事務局 |
| B 推薦する理由 (業績タイトルをつける) | 日本薬史学会会長 |
| (2)被推薦者の履歴書 (1 ページ) | TEL (03) 3817-5821 |
| (3)関連する業績リスト (形式不問) | |

第 10 回柴田フォーラム報告

柴田フォーラム委員長：船山信次

日本薬史学会主催「第 10 回柴田フォーラム」が、2017 (平成 29)年 8 月 5 日 (土)東京大学大学院薬学系研究科 南講義室 (〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1)にて開催された。猛暑の中、出席者は 48 名を数えた。

開会に先立ち、船山委員長の挨拶の後、折原裕日本薬史学会会長から、これまでの第 1 回～第 9 回までの柴田フォーラムについて紹介された。

今回は、第 10 回目の柴田フォーラムということで、日本薬史学会の設立にも御尽力された清水藤太郎先生の縁者である清水眞知先生と、日本薬史学会の会長としても御尽力された柴田承二先生と縁の深い奥山徹先生に講演をお願いした。

■講演 1 清水藤太郎と平安堂薬局

2017年8月5日 14:00～15:20

清水眞知先生 (NPO 法人薬剤師と薬局活動
ネットワーク・平安堂薬局顧問)

清水眞知先生は、『日本薬学史』などの著者であり、東邦大学名誉教授でもある清水藤太郎先生のお孫さんの奥様にあたり、御自身も薬剤師である。清水眞知先生は清水藤太郎先生が薬剤師として活躍された平安堂薬局の歴史や、清水藤太郎先生の生涯についてお話になられた。講演の途中で、清水藤太郎先生の肉声も聞かせていただいたが、実に若々しくまた歯切れの良い話しかたをされる方だと思った。

平安堂薬局は明治3年に横浜・馬車道に家伝薬「上気平安湯」を主力商品として創業、本年度で147年目を迎える。清水藤太郎先生はその三代目である。仙台市の御出身で、前名を長尾藤太郎といい明治19年に生まれた。16歳で薬学の道に入るきっかけとなった仙台医学専門学校(現東北大学)の事務員となり、19歳で薬剤師国家試験に合格、20歳になるのを待って薬剤師登録、神奈川県庁衛生技師として横浜に足を踏み入れた。県の衛生関係の仕事と共に県薬の理事になり、二代目の清水榮助氏との縁が生まれ、長尾藤太郎は養嗣子となって清水姓となった。

清水藤太郎先生は、横浜植物会への参加により牧野富太郎博士に、また、東大薬学科生の植物採集への参加で朝比奈泰彦教授に指導を受け、正倉院薬物調査や日本薬史学会の創設などその後の活動につながった。神奈川県薬剤師会会長時には、横浜優良品販売会(ハマユウ)を発足させ乱売矯正に努めた。昭和10年から帝国女子医薬専門学校(現東邦大学薬学部)で調剤学を担当し、薬剤学その



後薬局方や漢方なども講義し、昭和46年まで36年間学生を指導された。

清水藤太郎先生は調剤学(薬剤学)、薬局方、薬学史、漢方、薬局経営学、薬学語学の6部門に精通し、約100冊の専門書を著された。実学の大家であり、教育者、薬剤師職能、薬局経営者、職能団体の長としてその実践に邁進した稀有な人物。常時薬学だけにフォーカスする意志の強さと職業人薬剤師の未来を応援し寄り添う優しさにあふれた人物でもあったという。

■講演 2 柴田承二先生との思いを語る

2017年8月5日 15:30～16:50

奥山徹先生(学校法人明治薬科大学理事長)

奥山徹先生は、柴田承二先生が東京大学定年退職の後、明治薬科大学教授として赴任されてから、御一緒に活躍され、正倉院薬物の研究にも携わられている。

明治薬科大学大学院修士課程の生薬学講座は黒野吾一教授(金沢大学定年退職)と奥山徹助教授でスタート(1975年4月)したが、同年12月に黒野教授が逝去された。柴田承二先生は1976年3月に東大薬学部教授を60歳で定年退職をされ、明治薬科大学教授として着任された。

この講演では、柴田承二先生の米寿の際に刊行された『柴田承二 薬学研究余録』の中で語られた明治薬科大学との係わり、並びに明治薬科大学を通して奥山先生とのふれあい・思い出等を紹介してくださった。

柴田承二先生が東大時代に生薬の研究を行うことになったきっかけは、“正倉院薬物との出会い”であったと述べられていたことも紹介された。正倉院第一次調査(朝比奈泰彦団長:1948-49年)に引き続き、第二次調査(1994-95年)では団長として、正倉院宝庫の中で生薬の鑑定・同定を行うと共に、関連する研究を展開されたとのこと。この第二次調査には奥山徹先生も参加されている。

奥山先生が教授を退任された際には柴田先生から祝辞が寄せられたことや、柴田先生が時間を実に有効に使われ、忙しい中でも昼休みにテニスを



され、研究室の旅行でもテニスコートのあるところを選ばれたこと、夜は学生たちとも酒を飲みな

がら語りあわれたことなど、明治薬科大学にての交流の思い出などもお話しになられた。

柴田フォーラムの後、17時より薬学図書館1階ロビーにてビア・パーティが開催され、29名参加。船山委員長の司会により、本会名誉会員の山田光男先生の乾杯の音頭にてパーティの開会、和気あいあいとした中で、旧交を温めあった。中締めの前には五位野政彦先生(本会理事)による「たにし踊り」が披露され、本会常任理事の西川隆先生の御挨拶にて締めとなった。

日本薬史学会 2017 年会 (埼玉)のご案内

年会長：船山信次 (日本薬科大学教授)

日本薬史学会 2017 年会 (埼玉)を下記の要領で開催します。本年会では、一般講演のほか、特別講演「百年を超えて生きる医薬品～ジアスターゼ、アドレナリンと高峰譲吉～」(NPO 法人高峰譲吉博士研究会理事長 石田三雄先生)、市民公開講座「カレーと漢方にまつわる話 (日本薬科大学学長 丁宗鐵先生)を企画しました。当学会会員ほか関係の皆様のお来場をお待ちしております。

【開催期日】2017年10月28日(土)10:00～(受付開始9:30～)

【会場】日本薬科大学 さいたまキャンパス講義棟3 (日本薬科大学東門近く)

〒362-0806 埼玉県北足立郡伊奈町小室 10281

TEL: 048-721-1155 (大学代表)

【年会事務局】事務局長:新井一郎 (日本薬科大学教授)

TEL: 048-721-6457 / FAX: 048-721-6529

E-mai: yakushi2017@nichiyaku.ac.jp

【懇親会】年会終了後、日本薬科大学食堂厚生棟4階で行います。

【発表演題の申込み】締め切りました。多数の申込み、ありがとうございました。

【年会参加申込み】参加申込書(書式は日本薬史学会HPにあります)に記入し、年会事務局にお送り下さい。メールの件名には「薬史学会 2017 参加申込み」とご記入下さい。事前参加申込みは、10月7日(土)をもって締め切ります。参加費は、事前振込みとなりますので、10月7日までに振込み下さい。それ以降は当日参加扱いとなります。

【振込先】取引銀行:埼玉りそな銀行伊奈支店(店番号333) 預金種別と口座番号:(普)3958761

名義人:日本薬史学会 2017 年会(埼玉)実行委員会

【参加費】①年会:一般会員(事前登録4,000円・当日参加5,000円)/一般非会員(6,000円)/学生(会員無料・非会員1,000円) ②懇親会:一般5,000円/学生1,000円

【薬史ツアー】木村孟淳記念日本薬科大学漢方資料館見学会(学会開催棟1階/随時見学)

以上、ご来場をおまちしております。

第9回 日本薬史学会関西支部研修会報告

日本薬史学会関西支部 宮崎 啓一

梅雨のさなか、晴れ間のみえる穏やかな一日、平成29年7月1日(土)、17時より『キング オブ キングス』(大阪市北区梅田1-3 大阪駅前第1ビルB1)におきまして「第9回日本薬史学会関西支部研修会」が開催されました。今回当関西支部会員の3名を講師に「薄荷をめぐる歴史の変遷と今日」と題して、話題をご提供いただきました。

まず冒頭に当関西支部の村岡 修支部長が所用にて今回ご欠席のため、播磨章一理事に開催のごあいさつをいただきました。

ごあいさつの内容の一部として、播磨理事が本年米寿をお迎えになられたこと、現在大阪市内の医療機関の薬局において、患者さまの生活指導を担当されていること、などをご紹介いただきました。誰もが認めることと存じますが、ますますお元気な播磨理事の、健康長寿を实践され思慮分別高く優しいお人柄は、医療現場でのご指導で、さぞかし多くの患者さまに生きる希望と勇気を与えていらっしゃるものと、参加者一同きき入りました。

播磨理事の本会合冒頭のごあいさつではずみをつけ、この後“薄荷栽培と加工品製造の歴史”(長岡実業株式会社 川崎元士氏)、“岡山からの薄荷栽培”(株式会社エバルス 土岐隆信氏)および“和種ハッカの学名変遷”(京都大学大学院薬学研究科 伊藤美千穂氏)の3演題を一気に駆け抜けました。

まず川崎氏からは本研修会で話題の中心であります薄荷について、ペパーミントとスペアミントとの比較を植物形態学および各精油の主要成分を交えてご説明いただきました。

この後、氏が勤務される長岡実業(株)の1804(文化元)年の大阪伏見町での創業に始まり、薄荷の仲買の開始、1897年(明治30)頃の横浜における薄荷製造の着手、関東大震災後に本社・工場を兵庫県神戸市に、さらには同県西宮市内に移転してから今日に至る歴史を国内外の薄荷に関する歴史的な変遷も

織り交ぜ、詳述されました。

次に岡山県ご出身の土岐氏によります講演におきまして、薄荷の栽培は1817(文化14)年、岡山県総社市で始まり、1965(昭和40)年頃まで岡山県にて大規模に栽培されてきましたことが紹介されました。1937(昭和12)年頃には日本は世界の薄荷生産高の8-9割を産出し、薄荷は日本の主要な輸出品のひとつであり、北海道そして岡山県が代表的な産地でありました。

国内の薄荷栽培については、幾多の変遷を経て、戦時中の食糧増産のために減反、合成メントールの普及(昭和41年50%)および貿易の自由化(昭和46年、58年関税引下げ)によって、国内の薄荷栽培は衰退しました。

昨今の薄荷栽培として、①現在インドおよび中国で栽培生産(わずかに北海道で栽培)、②東洋薄荷工業株式会社(岡山県里庄町)では輸入した取卸油を精製し「薄荷」製造、および③岡山県倉敷市の市民団体「元倉敷未来計画」の活動による薄荷の利用法研究(倉敷ハッカ)をとりあげることができます。これらのことから、土岐氏は江戸時代末期に始まった岡山県総社市の薄荷の栽培の歴史がここにも息づいていると考えておられます。

本研修会の3番目の和種ハッカの学名に関する講演におきまして、伊藤氏からは先ず第17改正日本薬局方収載のハッカの学名 *Mentha arvensis* Linné var. *piperascens* Malinvaud (*Labiatae*)のご紹介とともに、学名の命名法則の解説がありました。次にハッカは *M. arvensis* の亜種ではなく、北米自生とされてきた *M. canadensis* と同一であることが遺伝子調査により確かめられており、現在の植物分類学では、ハッカは *M. canadensis* とされていることが紹介されました。

また、*M. canadensis* は、(和種ハッカではない) *M. arvensis* と *M. longifolia* の両原種より600万

年前頃に発生した古代の天然交雑種であることが分かってきました。加えて、この同一種の異なる精油発現系の株が、東アジア(メントール系)と北米(ブレゴン系)で定着したと推定されていることが紹介されました。このように古くは博物学的に分類されていた *Mentha* 属の植物の分類が、遺伝学的に整理・再分類されていることが紹介されました。

当関西支部におきましては、しばらく研修会が開催されなかったこともあり、今回3名の講師の先生方によりまして、“薄荷”をめぐって共通の話題ご提供が実現しました。3先生方は各々企業、(元)行政およびアカデミアのご所属の方々であり、しかも関西支部のメンバーのみで講師を構成することができました。

中部支部だより

中部支部講演会の演題募集と開催案内

中部支部長 河村 典久

下記の通り日本薬史学会・中部支部例会を予定しております。また、演題の募集も行っておりますので、皆様のご参加をお願いいたします。開催場所は前年度と同様金城学院大学・栄サテライトにて予定しております。

なお、演題等開催の詳細は決まり次第、本日本薬史学会ホームページの『イベント案内支部活動』に掲載しますので、ご覧頂けます様よろしく願いいたします。

記

日 時：平成30(2018)年2月10日(土)午後2時より
場 所：金城学院大学・栄サテライト
〒460-0003
名古屋市中区錦三丁目15番15号
CTV 錦ビル4階(セントラルパーク地下街10A出口前)

研修会には合計33名(懇親会参加者30名)の参加者のうち8名の香料会社ご勤務の方々にもご参加いただきました。

研修会後の懇親会におきましても、“薄荷”やその他の話題に花が咲いたようで、今回の研修会をきっかけに新規会員として当学会にご入会いただいた方もございます。

また、本研修会の開催にあたりましては、東京化成販売(株) 大阪営業部さまよりご協賛いただき、ノベルティーをご提供くださいました。ここに厚くお礼申し上げます。

上述のとおり関係者の皆さまのおかげで本研修会を盛会に終えることができ、次回の開催に期待も込め、閉会いたしました。

講演申し込みは中部支部事務局までお願いいたします。

・中部支部事務局

中部支部事務局長 飯田耕太郎
名城大学薬学部 薬学教育開発センター 教育開発部門
〒468-8503 名古屋市天白区八事山150
TEL：052-839-2710(直通)FAX：052-834-8090
E-mail：iida@meijo-u.ac.jp

〈関西支部への参加〉

7月1日の本薬史学会・関西支部のメントール関係の有意義なご講演に支部を超えて参加させていただき大変に参考になりました。また、懇親会にも参加させていただきました。多くの参加者のもと、支部活動の今後の体制を見たような感じでした。関西支部の皆様にお礼申し上げます。

「薬学史事典」読書会の報告

国際委員長 森本和滋

1. 新国際委員会での読書会の提案とその後の展開

津谷国際委員長から、引き継いで新たなメンバーでの第1回国際委員会を2016年7月1日ナポリの下町食堂お茶の水店で開催した。これからの国際委員会の活動として、各委員の抱負を出し合った。当方は、それぞれの委員が執筆された4月刊行の「薬学史事典」の読書会を提案した。参加した委員の賛同が得られ、今年3月の常任理事会を経て、今年4月17日の総会で実施が決まった。幸いにも本事典の刊行元である薬事日報社のご厚意で会議室を提供して頂けることになりました。

2. ISHP News Letter18 で薬学史事典刊行の紹介

今年3月Newsletter 18, 2017が刊行された。JSHPの様子は、18～20頁に掲載され、新刊紹介のサイトで薬学史事典のカラー写真をご覧になられた方もあるかと思います。

<http://histpharm.org/wordpress/wp-content/uploads/2015/12/ISHP-Newsletter18.pdf>

3. 読書会の様子

第1回(5月24日) 各論121「戦後の医薬品審査の

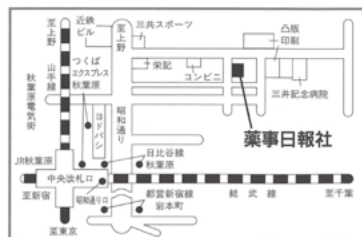
歴史 PMDEC新設からPMDAスタートの頃」
森本和滋：1997年7月1日に新設されたPMDEC設立の経緯、新しい承認審査体制の構築と審査に大きな影響を与えたICHガイドライン等を4名の参加者と一緒に、声を出して順番に読みながら1時間半過ごしました。

第2回(6月21日) 各論107「病院薬剤師の歴史と業務の変遷」小清水敏昌：医薬品情報業務(DI)の誕生を、1971年「病院におけるDI活動の業務基準」が定められた頃からの歴史を辿った。小清水氏は、2008年第11回のJASDI学会の大会長を務められた。参加者4名で、辰野国際委員も参加された。

第3回(7月19日) 総論5「医薬分業の歴史」故中村健、近藤晃司：近藤氏が選んだ14カ所を、折原会長を含む5名で読んだ。「医薬分業の歴史証言で綴る…」のコピーも参考に、石館守三会長と武見太郎会長の歴史的会談や入院調剤技術料の誕生秘話等、インパクトのある興味深い歴史証言を近藤氏から聴くことができた。

薬学史事典第4回読書会のご案内

- 1) 日時: 9月20日(水) 17時30分～19時
各論116「薬害の歴史とそれに伴う薬事制度の変遷」齋藤充生
なお、今後の予定は10月18日、11月22日です。
- 2) 場所: (株)薬事日報社 会議室(席数8席程度)
- 3) 参加希望者は、2日前迄に、下記アドレスにメールください。
<oriharay@mol.f.u-tokyo.ac.jp>
前日に、薬事日報社に参加人数等を連絡します。
- 4) 読書会の担当: 森本(国際委員長)



〒101-8648 東京都千代田区神田和泉町1番地
☎(03)3862-2141 FAX(03)3866-8408

4. これからの予定

第4回 (9月20日) 各論116「薬害の歴史とそれに伴う薬事制度の変遷」齋藤充生

第5回 (10月18日) 各論91「石館守三 ハンセン病撲滅から薬学を目指す」山田光男

第6回 (11月22日) 各論111「医薬品の流通業史」孫 一善

〔Book 紹介〕

宮原 誠 著

「衛生試験所小史」

司薬場から国立衛生試験所まで

A5版 133頁+附録 54頁 (非売品)

本書は、2016年6月24日刊行された。2017年5月26日国立医薬品食品衛生研究所 (NIHS) シンポジウム「用賀衛研70年の歩み～歴史を振り返り、移転後を展望する～」が開催された。今年度中に川崎市川崎区殿町に移転するため、多くのNIHS関係者が詰めかけた。かつての仕事仲間・宮原誠博士から本書を謹呈されたので、その概要を紹介したい。

宮原は、1874年(明治7年)司薬場誕生以来のNIHSの歴史を2018年から6年間、小史としてNIHSのHPに纏めてアップロードした。その内容を纏め、非売品として出版した。第1～9話と附録から構成されており、第2話「日本薬局方誕生」には、1869年(明治2年)、オランダのユトレヒト軍医学校の教師アントン・ヨハネス・ゲールツが日本薬局方の父と呼ばれる所以が解説されている。岩倉具視文部省医療局長が1875年薬局方の原案作成をゲールツに委託した。その結果、彼は草稿を書き続け、1877年末に完成させた。

第6話「占領期の厚生省東京衛生試験所(医薬品編)」には、空爆で焼け落ちた和泉庁舎の写真や、1946年2月15日世田谷用賀の旧陸軍衛生材料廠への移転、1949年5月に厚生省設置法が制定され、その中で国立衛生試験所任務が規定され、検定検査業務が組織としての仕事として位置づけられたこと

5. おわりに

若い薬学生に「使命感と責任感の醸成」の教育を行う教材の宝庫が、薬学史事典だと思っております。読書会は、30回は続けたいと願っております、地方の大学の先生も、是非一度様子を見に秋葉原までお越しくださいませ幸いです(図)。



等、用賀に移転した経緯が詳細に記されている。

第9話「化学物質の擾乱と動物実験の発展」には、1978年生物安全性試験研究センターの設置で、サリドマイド等妊婦が取り込んだ化学物質が胎盤を通過して母親の体内にいる胎児に及ぼす様々な現象を毒性と捉える新たな技術、知識、施設及び人員の導入がなされたこと等が記されている。

附録の「江戸時代末の天然痘。コレラの流行と衛生」には、種痘所(東部下谷絵図)、ワクチニア牛痘の植え継ぎ(人伝法)等の興味深い絵図が挿入されている。

(森本 和滋)

開局における 保険調剤業務の遷り変り

平安堂薬局 清水 眞知

医薬分業による保険調剤がまがりなりにも始まった昭和40年半ばの状況は市井の薬局にとっては処方せん薬としての医薬品の確保、集薬に奔走する日々から始まったと言っても過言ではない。病院で行われていた薬袋を並べて患者が窓口に来ると手渡すという光景はまだ目に焼き付いている。保険薬局の窓口も大方違いは無く処方せん通りに薬を調剤し、揃えて窓口に進み出、正しく使用してもらう為の服薬指導は医薬品の使用法と使用量の用法指示説明であった。来局する患者に明るく挨拶をし、処方せんを受け取り、患者の名前、年齢、時に体重、連絡先の住所、電話番号を聞く。最初は投薬カウンターなどもないところもあったが、次第に待合スペースや椅子も用意され、現在に近い形、環境に整えられていった。このような保険薬局の初期の投薬（服薬指導）から現在までを追いかけてみるとその変化は、医療環境の変化、人々の価値観の変化に従い、厚生省また厚生局からの指導も相まって薬剤師自身の考えより画一的なシステムの上を動いていくことになった。1983年から

は処方内容の確認が始まる。また環境的には医薬連携が必要との認識が示された。

1986年からは患者情報の収集や指導内容の薬歴管理が始まり、1996年からは処方意図の解析や患者への薬剤情報の提供、リスクマネージメントの導入で様々な情報の活用を行うようになる。2000年から始まった第5世代の調剤業務では更にこれまでの情報活用でのカウンセリングの重要性、後発品推奨の医療費削減対策、医薬品使用のモニタリング、支援者に対するコンサルテーションの推奨に積極的な取り組みが求められるようになっていく。

現状は健康サポート薬局として薬剤師はよく患者の相談に乗り、くすりの使用に関するばかりでなく、予防や養生に関してもその役目を果たすことも期待されている。顧みれば保険調剤のない時代に行ってきた相談スキルと適切な医薬品の提供で信頼を得てきた諸先輩薬剤師の時代の基本に舞い戻った感がある。これからは量ばかりを求めた調剤業務を超えなければならない。

編集委員会からのお知らせとお願い

編集委員会では、常任理事会の決定および理事・評議会の承認により経費削減のため、第75号の「薬史レター」からEメール配信に原則切替えました。日本薬史学会ホームページ上に新刊薬史レターが開けるアドレスを記載しておきますのでクリックするとご覧になれます。また、発行回数は年4回を2回とし、1号のページ数は原則8ページ以内で発行しています。これで経費は大幅な削減が見込まれます。ご意見をお聞かせ下さい。

日本薬史学会編集委員会

編集委員長：西川 隆

編集委員：荒木 二夫 小清水敏昌 砂金 信義 ヨング・ジュリア

薬史レター 第78号

2017年9月

編集人：西川 隆 発行人：折原 裕

日本薬史学会 The Japanese Society for History of Pharmacy (JSHP)

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16 (助学会誌刊行センター内 日本薬史学会事務局)

tel : 03-3817-5821 fax : 03-3817-5830 e-mail : yaku-shi@capj.or.jp <http://yakushi.umin.jp>